

地球1周4万キロウオーク達成 エンジョイウオークング



海老沼善作 さん
(東二丁目・74歳)

今年4月、地球1周にあたる4万kmを歩き通し、日本ウオーキング協会から記録認定を受けた海老沼善作さんに、お話を伺いました。

「定年退職後、健康管理と仲間づくりを目的にウオーキングを始めました。教育委員会(体育協会)で実施している『ザ・ウオーキング、うさぎコース』に参加したのが始まりです。それから全国各地の行事に参加するようになりました。ウオーキングを始めてから健康状態はすこぶる良好です。」と海老沼さんは日焼けした顔をほころばせました。

「今まで参加した大会では、東海道五十三次ウオークが印象深かったですね。これは東京から京都までの旧東海道の宿場をたどるものでした。1日目は東京から横浜(保土ヶ谷宿)まで歩き、一旦家に帰り2日目は平塚までという具合に進んでいきます。最終の京都三条に到着するのに5年かか

ぶんがくかん発
Vol.81

社会派推理の傑作復活 『皇帝のいない八月』

ここに一編の推理小説があります。1978年に講談社より刊行され、その後文庫化。今年の4月5日、1997年の日本文庫からの発行から7年ぶりに新風舎文庫として復活した、社会派推理小説の傑作といわれた作品です。

またこの作品は刊行と同時に、監督・山本薩夫、主演・渡瀬恒彦、山本圭、吉永小百合という豪華キャストで映画化され、大きな話題を呼びました。

読者諸賢はもうおわかりでしょう。その作品は『皇帝のいない八月』。著者をご存じ、古河出身の推理作家小林久三です。

社会派推理小説といえは、まずは松本清張を想起されると思います。昭和30年代初め『点と線』や『眼の壁』などの作品で、それまで日本のミステリーが取り上げたこと

のなかった、官公庁の汚職や右翼政治家、手形詐欺などの社会性豊かな題材を扱い、政治や権力の暗部を鋭くえぐりました。清張に続いて水上勉、森村誠一が登場、推理文壇には空前の「社会派」ブームが巻き起こります。そして昭和49年、その社会派の系譜に連なる優れた作家として、古河出身の小林久三が登場します。

足尾鉾毒事件に奇怪な密室殺人を絡め、国家権

力の暗黒面を鋭く告発したデビュー作『暗黒告知』をはじめ、『黒衣の映画祭』『灼熱の遮断線』『蒼ざめた祖国』『日蝕の檻』『むくろ草子』など数々の傑作と言われる作品を発表しました。しかし、残念なことに、現在では、その作品の多くが絶版となってしまっています。

今回、数多い小林作品の中で頂点ともいえる『皇帝のいない八月』が再刊されたことは、小林久三ファン、そして社会派推理ファンにとって、まさに朗報といえましょう。

推理小説的には列車ジャックという、鉄道ミステリーの装いを取りながら、実は、自衛隊のクーデター計画を扱った政治サスペンス小説。

『皇帝のいない八月』は社会性あふれる題材を扱うと同時に、映画的でダイナミックなストーリー

展開により組み立てられているという点で、さらに魅力的な作品となっています。映画界での助監督・プロデューサーを経て、作家に転身した小林久三の真骨頂といえましょう。

四半世紀も前に書かれた作品ですが、今なお、その魅力は決して色褪せていません。

郷土が誇る作家の傑作復活。ぜひご一読されることをお勧めします。



新風舎文庫『皇帝のいない八月』